

Title	鉄輪考
Sub Title	Studies of Kanawa
Author	長尾, 一雄(Nagao, Kazuo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1961
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.12, (1961. 7) ,p.19- 35
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00120001-0019">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00120001-0019</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 鉄輪考

長尾一雄

「鉄輪」は女の嫉妬をあつかつた謡曲である。都の女が、嫉妬に狂って鬼になり、うわなり打ちの如き振舞いに及ぶという内容は、高貴な女性を扱つた「葵上」とはかなり似た内容を持っている点で、しばしば引き合ひに出されている。この二曲の、相似た点も、また異つた点も、次のような部分の対比によつて示され得るであらう。

それ娑婆電光の境には。恨むべき人もなく。悲しむべき身もあらざるにいつさてうかれそめつらん

唯今梓の弓の音に。引かれてあらはれ出でたるをば。如何なる者とか思し召す。これは六条の御息所の怨霊なり。われ世にありし古は。——中略——

唯いつとなきわが心。もの憂き野辺の早蕨の。萌え出でそめし思ひの露。かかる恨みを晴らさんとて。これまであらはれ出でたるなり

思ひ知らずや世の中の情は人のためならず。われ人のためつらければ。われ人のためつらければ必ず身にも報うなり。何を歎くぞ葛の葉の恨みは更に、尽きすまじ恨みは更に尽きすまじ

あら恨めしや。今は打たでは叶ひ候まじ(葵上)

われは貴船の川瀬の螢火。頭に戴く鉄輪の足の。焰の赤き。鬼となつて。臥したる男の枕に寄り添ひ。いかに殿御よ。珍しや。恨めしや御身と契りしその時は。玉椿の八千代二葉の松の末かけて。変らじとこそ思ひしに。などしも捨ては果て給ふらん。あら。恨めしや。捨てられて

捨てられて。思ふ思ひの涙に沈み。人を恨み。夫をかこち。ある時は恋しく。又は恨めしく。起きても寝ても忘れぬ思ひの。因果は今ぞと。白雪の消えなん命は今宵ぞ。いたはしや

悪しかれと。思はぬ山の峯にだに。思はぬ山の峯にだに。人のなげきは生ふなるに。いはんや年月思ひに沈む恨みの数。積つて執心の鬼となるも理や(鉄輪)

この二つの引用によって示されるように、「葵上」のシテは、恨みの中にも「娑婆電光の境には恨むべき人もなく」と、理性に責められる心境を示し、「唯今梓の弓の音に。引かれてあらはれ出でたるをば。如何なる者とか思し召す」と名のり出る口調には、あられない思いに乱れた心を恥じながら、しかも自分の身分をある威厳を以て示さずにはいられない王朝女性の恥と誇りととの相剋がこめられている。それにもかかわらず、「唯いつとなきわが心。もの憂き野辺の草葎の」と美しい修辭によって言われているように、いつか葵上のもとへ恨みを述べに来ねばならなかったのは、高貴な誇りある女性の胸をもむしばまずには置かなかつた嫉妬の情のなせるわざなのである。

源氏物語ではその間の事情を

この御生霊、故父大臣の御霊などいふ者ありとき、給ふにつけて思しつゞくれば、身一つの憂き嘆きよりほかに人を悪しかれなと思ふ心もなければ、物思ふにあくがるなる魂はさもやあらんと思し知らるゝ事もあり。年ごろよろづに思ひ残すことなく過ぐしつれど、かうしもくだけぬを、はかなき事の折に、人の、おもひ消ちなきものにもてなすさまなりし御禊の後、ひとふしに思し浮かれにし心、しづまりがたう思さるゝけにや、少しうちまどろみ給ふ夢には、かのひめ君と思しき人の、いと清らにてある所に行きて、とかくひきまさぐり、うつゝにも似ずたけく厭きひたぶる心いできてうちかなぐるなど見給ふ事、度かさなりにけり。

と、理性に反して激して行ってしまう感情を描写し、

あな心憂や。げに身を捨てゝやいにけん。

と、ついに理性の支配をのがれて行ってしまう自分の魂を、扱いかねている心境をのべている。「葵上」の作者は原典に見られるこの心理の動きを、理性と感情との相剋として描き、

猶も思ひはます鏡。その面影も恥かしや。

と、自らの思いに自ら恥じる姿を見せながら、返す謡では

枕に立てる破れ車うち乗せ隠れ行かうよ。

と、葵上を引立てていづくへともなく伴つて行こうとするのである。

これに反して「鉄輪」のシテは、理性を伴わぬ嫉妬心のとりこである。

余り思ふも苦しきに。貴船の宮に詣でつつ。住むかひもなき同じ世の。内に報いを見せ給へと

と、前シテのサシにあるように、嫉妬のあまり報復を神に祈りに行くのであり、六条御息所のように男には手を触れず女のみを災いをもたらずではなく、「あだし男」が始めからの目標なのである。

殊更恨めしき。あだし男を。取ってゆかんと

とあるように、その恨みはあくまで直接的であり、仮借するところがない。

原典の「平家物語剣の巻」には

帰命頂礼貴船大明神、願はくは七日籠りたる験には、われを生きながら鬼神になしてたび給へ。妬しと思ひつる女取殺さん。

とあり、恨みの相手は女となっているが、この極めて直接的、且つ具体的な主人公の思いの行きつく先を、男として脚色した謡曲作者の態度は、単にこの説話の世界のおもむかんとする勢に乗じて筆を走らせたと解しても通用しそうである。

たしかに、シテの恨みは報復の相手をとるることによって、より具体的に激しく示されるであらう。しかし、そのことによってシテの内部には「葵上」の場合とは別の事が起るのである。

ある時は恋しく。又は恨めしく

と言ひ、

白雪の消えなん命は今宵ぞ。いたはしや

とシテが心境をもらす部分では、「葵上」の場合のような知と情との相剋は語られて居ない。相剋があるとすれば、それは男への愛情と恨みとの間にこそ見られるべきものなのである。

悪しかれと。思はぬ山の峯にだに。思はぬ山の峯にだに。人のなげきは生ふなるに。いはんや年月思ひに沈む恨みの数。積って執心の鬼となるも理や

という地の謡は、単に修辞上の言い廻しでこうした表現を採っているのではなく、シテの恨みが裏切られた愛情を年経て持ち続けたために生れたものであることを言おうとしているのであろう。

そうした角度から嫉妬が語られている以上、第一にあらわれるべきものは「葵上」の場合のような理性と感情との問題ではなく、ただひたすらなる恨みの感情である。「葵上」と「鉄輪」の成立年代の前後は今日わかっていないが、能作書や申楽談義に現われている葵上に対して「鉄輪」の成立をおくらせて考えることが許されるならば、その作者は「葵上」を意識していなかったとは考えられない。源氏物語にまでさかのぼって、嫉妬物語の代表とされて来た六条御息所の話の思い合わせたとしてもよい。そうした見方を進めるとき、「鉄輪」の作為として見出されるのは、「葵上」または「葵上」的なものの世界からつとめて離れようとする意識である。それは非王朝的な志向であり、没理性的、非高貴の世界へとシテを導き入れようとする意向が、作者にあつたのだと言える。

「剣の巻」の顕著な説話のひとつである鉄輪のものがたりは、嫉妬の激しさにおいても、そのあつかわれ方においても、またおそらく有名さの程度においても「葵上」に匹敵するものでありながら、著しく非王朝的且つ行動的なこと、謡曲製作年代の一般の人心に、「葵上」に比してより近く訴え得る要素を持っていた。このことに着目した謡曲作者は、「葵上」の世界に対する一種の世話物的な位置をこの説話に見出して、その世界を世話物として完成しようとしたのであろう。その志向にもとずいて、この説話は二つの重要な改変を脚色にあたって蒙っている。一つは嫉妬の鋒先が直接男に向けられたことであり、一つは原作の「或公卿の女」を「下京辺

に住むもの」として、身分に関する詞を省いた点である。この女の夫であるワキヅレは、現在素袍上下で舞台に現われるから、まんざら身分のない人でもないのであるが、「或公卿」に比べれば著しく庶民的にならされていると言うべきであろう。

臥したる男の沈に寄り添ひ。いかに殿御よ。珍しや

とか

あら。恨めしや。捨てられて

また

いでいで命を取らん

また

今更さこそ。悔しかるらめさて懲りや思ひ知れ

また

殊更恨めしき。あだし男を。取ってゆかんと

というような語句のはしばしを採ってみても王朝物などの謡曲に比べてはなはだ卑賤な語を好んで使っていることが知られよう。

「鉄輪」は物狂いの能である。この言葉を狭義に解釈すればいわゆる狂女ものの能と言われるもののことをさすと言ってよいのだが、嫉妬のあまり狂乱して鬼となった女に物狂いの性格を見出すことは難かしいことではない。ここではクルイを持つ能という、物狂い能の芸能的な規定の枠をとりはずして、シテの性格という点から考えて見たいのである。

物狂い能をかく芸能的規定から解き放ってみると、その呼び名は極めて多くの能にあてはまるようである。クルイとは狂女ものの多くに見えるように一個の芸能であり、くるいめぐるといふ動作を中心としたものであったと言われるが、その内的要件は心理的の異常な興奮にあった。「桜川」の狂女はワキヅレの「あら笑止や。俄に山嵐のして桜川に花の散り候ふよ」というさそいのことばにつれて狂って居り、「班女」は「あら悲しや狂へとな仰ありさむらひそとよ」と言いながら、ワキヅレの「さて例の班女の扇は候」によって

狂っている。「隅田川」のクルイは完全ではないが、都鳥の問答によって狂うのであるし、「花筐」には型通り宣言によって狂い舞う以前に、心理的な興奮を見せる通常「クルイ」と呼ばれる一段があり、それは思い出ある花筐をワキに打ち落とされるところから始まっている。このような例はすべて自分のたずねる子または夫を思いおこさせるような条件によって狂って居て、その詞章も心理的興奮の要素が顕著である。

### 「班女」の

さるにてもわが夫の。秋より前に必ずと夕の数は重なれど。あだし言葉の人心。たのめて来ぬ夜は積れども。欄干に立ちつくして。そなたの空よとながむれば。夕暮の秋風山嵐野分もあの松をこそは音づるれ。わが待つ人よりの音づれをいつ聞かまし

せめてもの。形見の扇手にふれて。風のためよと思へども。夏もはや杉の窓の。秋風ひややかに吹き落ちて団雪の。扇も雪なれば。名を聞くもすさまじくて。秋風恨みあり。よしや思へばこれもげに逢ふは別れるべし

という詞章は、愛が恨みに変わって行く過程をのべているが、この世界から「鉄輪」の世界に達するのはそう遠くはないと思われる。ただ「班女」は

その報いなければ今さら。世をも人も恨むまじ唯思はれぬ身の程を。思ひ続けて独居の。班女が闊ぞさみしき

と、あきらめの境地へと志すのであるが、「鉄輪」のシテはついに恨みへと身をまかすのである。そこには「班女」にあるような感情の変化は見られず、ただ嫉妬へと突き進む情意の激しさが見られるのみである。愛は時折り彼女の心に影を落して来てしもとを打つ手をにぶらせはするが、「いでいで命を取らん」という叫びにかき消されてしまつてその相剋は長くは続いていない。そうした点では「砧」のような半夢幻能や、「道成寺」のような鬼の能に近いと言えるが、物狂い能の範囲の中で見ればやはり一種の異例であり、物狂い能の中でも世話物的な位置にあることがわかるのである。

ところで、広義の物狂い能には二つの種類があると考えられる。それは、あからさまな心理的理由があつて狂っているものと、そうでないものとの区別である。狭義の物狂いである狂女ものや、男物狂いではあるが「綾鼓」「恋重荷」などの狂乱ものは前者に属する。「恋重荷」では後半は一種の鬼能になるが、恋の苦役である重荷をどうしても持ち上げることの出来ない前シテが「恋の奴になり

果てて」と思いのほどを語るうちに、「しめちが腹立ちや」と心が変わり、「乱れ恋になして思ひ知らせ申さん」と幕に駆け込む気組みは物狂いの心理過程を簡潔に脚色して、いわゆる物狂いの範疇をはなれた一個の劇能として成功している。「百万」や「隅田川」のよきな狂女ものは、恋重荷とは心理の向きが逆になっているが、或る心理的の転機を経験した後の姿のみを描いている。他の狂女ものは中入前の姿にその転機以前のものを見せ、後シテに転機後のかたちを見せるわけである。

「葵上」や「鉄輪」のシテは、「恋重荷」と同じ向きの心理的内容を持っている。そして「葵上」では転機後の姿を見せるのだが、初同の「恨みは更に尽きすまじ」まではその転機が完成するまでの劇的の積み重ねの役目をして居り、理性と感情の相剋という状態を通じて心理的内容がふくれ上って来て、「あら恨めしや」とひと声謡った後に「今は打たでは叶ひ候まじ」と高らかに言う所で、理性に対する感情の爆発的勝利という形で心理上の転機が完成するのである。これに対して「鉄輪」のシテは必ずしもそのような形式を踏んでいない。そこには物狂いの、もうひとつ別の形をとるものとの関聯が見出される。

それは、心理的要因によらないもの、即ち、他の靈魂がシテに憑くことによつて狂う場合である。「不思議や祝詞の神子物狂」と謡われている「巻絹」の場合のような神靈によるものや、「二人静」のツレにシテが憑くように、他人の靈がつく場合などがそれである。「葵上」のシテとツレの関係も、形式的にはこの部類に足を踏入れていることになる。

「鉄輪」のシテは、貴船の神に丑の刻詣りをする女である。

餘り思ふも苦しさに。貴船の官に詣でつ。住むかひもなき同じ世の。内に報いを見せ給へと

という参詣の動機は、心理的要件として充分な内容を持っている。しかし彼女は、その心理的要件が彼女の内部で自然なたかまりを見せるのを待つて狂うのではない。後シテにはそうした狂い方のおもかげがあり、「葵上」に似た心理構成を持つてはいるのだが、彼女の性格が常態とはつきりちがったものになったことを能の観客に印象づける瞬間は、そうした手順によつてはやって来ない。

「鉄輪」の三つの足に。松明をたて頭に戴き。顔には丹を塗り。身には赤き衣を召し。怒る心を御持ちあれとの御告」と、間狂言の役である社入の言う神の告げにしたがって鬼となるのであるが、貴船の神の憑人となって、神子物狂いをする、その心に神の荒々しい靈が宿つて仇し男のもとへ馳せ行こうというのであろう。

この部分は原典では

明神あわれや思しけん、誠に申す所不便なり、実に鬼になりたくば、姿を改めて、宇治の河瀬に行きて三七日浸れと示現あり。女房悦びて都に帰り、人なき所にたて簷りて、長なる髪をば五つに分け、五つの角にぞ造りける。顔には朱を指し、身には丹を塗り、鉄輪を戴きて、三つの足には松を燃し、続松を拵へて、両方に火をつけて、口にくはへつゝ、夜更け人定りて後、大和大路へ走り出で、南を指して行きければ、頭より五つの火燃え上り、眉太く鉄鑿にて、面赤く身も赤ければ、さながら鬼形に異ならず。とあって、貴船の神は精進潔斎して待てという意味の告げを与えているにすぎないのに、女は自から進んで鬼形を作り、人をおびやかしているのである。鬼形に変装する手順にはどういう意味があるのか、今はそれを検討する余裕を持たないが、おそらく調伏の呪法と関係があるのであろう。このようなあらわれ方をする鬼女にはたださまじい鬼の印象があるばかりで、そこには物狂いの性格を見出すことは出来ない。いわば神の意志の制約を鬼女は自ら破ってあばれ出してしまったのである。その故にこそ、鬼女は後に渡辺綱との力くらべのないきさつを演じることによって、貴船関係の説話の世界から出て行ってしまうのである。

謡曲の「鉄輪」では鬼の変装は神自身の指導によって与えられている。その点、神が自分から夫調伏の意志を明らかにしたことになり、貴船の神の軽薄さが責められそうな様子を示してさえているのだが、その告げの内容が、原典の告げと著しく異なる点は「水に漬る」という部分がなく、「怒る心を持って」ということのある点である。「水に漬れ」ということのないのは、精進潔斎して祈れという意味を、この神の告げが持たなくなったことを示している。謡曲の神は、もっと短刀直人に、願いの筋をかなえようとしたのである。それは女をいやが上にも興奮状態に置き、その興奮に自身乗りうつて男を調伏しようという意向のように考えられる。「怒れる心」を持つとは、即ちそのことであって、心理的な興奮に便乗して神がかりの状態をつくり上げようといった考えなのであると思われる。はたせるかな女は

これは思ひもよらぬ仰せにて候。妾が事にてはあるまじく候。定めて人違ひにて候べし  
と口には言いながら、「怒れる心」は勃然と起つて来て、

これは不思議の御告かな。まづまづわが家に帰りつつ。夢想の如くなるべしと。いふより早く色かはり。いふより早く色かはり。

気色変じて今までは。美女の形と見えつる。緑の髪は空さまに。立つや黒雲の。雨降り風と鳴る神も。思ふ中をば避けられし。恨みの鬼となつて、人に思ひ知らせん。憂き人に思ひ知らせん

と中入する。この突然のシテの変化は、心理的要件が充分熟したものと考へられない。いわば神の告げに触発されて狂い始めたのであり、そこに神の憑霊の力を考えることは難しいことではない。ここでは、シテの嫉妬の激しさを表現していることは言うまでもないが、同時に劇の手順としては、そうした要件が充分積み上げられない先に、神の意向の性急さが、演出効果の上で表現される結果になつていたのである。

能のシテは、神人に霊が憑いたものであると考へることが出来る。今日のように能を演劇的のみに見る時代でなく、多分に神事芸能の記憶を持ちつつ能を見ていたころには、そうしたことももう少し顯著に人々の前にあらわれていたであらう。複式夢幻能の前シテの演出などに、そうした憑霊的の演出を見出すことは、今日では台本の精細な検討を通して出来にくくなつてしまつた場合が多い。それでもそうした複式夢幻能の前シテに、第三者的な性格と、シテ本人としての性格との転換を發見することは、曲によつてはそう難しいことではない。よく引用される「求塚」の、菜摘女である前シテが、小竹田勇、血沼の大丈夫まじろおの二人の、菟名日処女を争つて生田川の水鳥を射たことをのべて来た語の途中で「その時妾思ふやう」と突然謡い出す部分とか、下懸の「巴」で、前シテが巫女女と名のつて登場し、「昔の事の思ひ出でられて候」と粟津の社頭で語りはじめる部分などに、そうした憑霊による性格転換の例を見ることが出来るし、前に挙げた「二人静」では、実際に巫女と霊とが同時に舞台にあらわれて、同じ手振りで舞い謡うという特殊な演出方法を採つている。この曲のツレの詞に

菜摘川のはとりにて。いづくともなく女の来り候ひて。餘りに罪業のほど悲しく候へば。一日経書いて跡弔ひて絶はれと。三吉野の人。とりわき社家の人々に申せとは候ひつれども。真しからず候程に。申さじとは思へども

なに真しからずとや。うたてやなさしも頼みしかひもなく真しからずとや。(中略) 近く来ぬれば雲と見し。桜は花に頭るるものをあら恨めしの疑ひやな

と、一人のツレの詞に明瞭に二人の会話を読みとることの出来るような大胆な演出も、巫女に靈魂の憑くという形式が自然のものであ

つたればこそ成立し得たのではなからうか。この曲のワキは

言語道断。不思議なる事の候ものかな。狂気して候は如何に。さて如何やうなる人の憑き添ひたるぞ名を名のり給へ。跡をば懇に  
弔ひて参らせ候べし。

と言つて居り、その発想は「巻絹」の地の

不思議や祝詞のつとの神子物狂。不思議や祝詞の神子物狂のさもあらたなる。飛行を出だして。神かたりするこそ。恐ろしけれ  
に近似しているし、「狂気」ということばから、いかにも自然に憑霊のことについてたずねていることも興味のある点である。

また変装によつて憑霊がおこり、それによつて性格が転換されることも、恋慕をあつかつた曲などでしばしば見られることである。

「松風」のシテ・ツレ兩人が、行平のことを慕つて狂っているうち、シテが形見の烏帽子長絹を身に添えて持つと、

捨てても置かれず取れば面影に立ち増さり。起伏わかで枕より。あとより恋の責め来れば。せん方涙に伏し沈む事ぞ悲しき

と狂うのは、諸説ある部分ではあるが、やはり憑霊のためと考えたい。「富士太鼓」の狂乱ではこのことはもっとあらわに起つて居り、

猶も思へば腹立ちや。猶も思へば腹立ちや。けしたる姿に引きかへて。心言葉も及ばれぬ。富士が幽霊来ると見えて。よしなの恨

みやもどかしと太鼓打ちたるや

と、太鼓の役争いの結果夫を失つた妻が、夫の衣裳で太鼓に向つて恨みをのべているとき、憑霊が起つたことを詞章の上で明らかに述  
べている。また「井筒」のシテは、

形見の直衣。身に触れて。恥かしや。昔男に移り舞

と、やはり昔の恋人である業平の装束で舞を舞うのだが、

さながら見みえし。昔男の。冠直衣は。女とも見えず。男なりけり。業平の面影。

見ればなつかしや。われながらなつかしや

と、業平と自己の二重つつしの影像を井筒の中に見て、忘我の状態に陥っている。これは憑霊状態の心理的要件を説明する例である  
う。

「鉄輪」の憑霊と物狂いは、およそこのような能楽脚色上の習慣の中から書かれたものであった。そこには、憑霊乃至性格の転換の契機は二通り描かれている。一つはシテの興奮であり、他の一つは変装である。前に挙げた例の通り、シテは変装のことを社人から聞いた時、直ちに狂って居り、他の変装ものの曲のように変装後興奮がたかまって行って狂うのではない。これは物狂いの中でも珍しい例であろう。貴船の神は鞍馬に居る神であるから、その土地の神らしく性急な性質なのであるか。またシテの女が、憑霊ということに関して異常に鋭い感度を持っていたということであろうか。いずれにしても丑の刻詣の不気味な印象にはふさわしい演出効果であろう。

社人はシテに「鉄輪の三つの足に。松明をたて頭に戴き。(中略)怒る心を御持ちあれとの御吾」を語った。シテはそれを聞いてただちに気色を変じたのだ、がそれには「怒る心を御持ちあれ」ということがひとつの契機をなしていると考えられる。即ち、貴船の神は、変装ということの他に、自ら興奮状態に身を置くべきことをシテに要求したのである。その答えは直ちにあらわれて

やあはやかやうに申すうち。何とやらものすさまじい体になり申されて候。これはいかな事。顔色が気変った。なうく恐ろしく

と社人が言うような状態に至るのである。シテの心理を考えて見るに、変装のことをまずこまごまと教えられ、その後、その変装にたすけられて興奮状態を得よとの神託であったものを、変装を含めて自分が鬼になれるという、シテにとっては悦ばしい誘惑に打ち克つ余裕もなく、たちまちに狂い心を生じたのである。その心理的变化には他の物狂いにあるような、興奮状態を演出的に醸成して行くという段階に欠けていて、まことに唐突な感じを受ける。神に詣ったその効果が、何の心理的手続きも経ずに突然果てしてしまうのである。しかもシテは神託の順序を取りちがえているのであり、変装以前に物狂いの状態に達するという、能楽脚色上の常套手段を破った方法をさえ採っているのは、シテにおける物狂いの効果を出来るだけ早く舞台上にあらわそうとした意図が働いていると思われる。「松風」や「富士太鼓」「井筒」の場合とは正反対の演出意図なのであって、変装ものの曲としてはやはり幽玄風な配慮をはなれている点で世話もの的な要素を指適し得るのである。

神の憑霊がかくすみやかに行われてしまうと、そこにはシテの心境を存分に語らせる余地がない。のみならず、「二人静」のような

場合と対比してみても、ツレの不信を詰問するようにして憑きあらわれて来るはつきりした目的性はこのいたずらな神靈には見出せない。貴船の神としてはむしろほんの気まぐれに女の願いを叶えてみたという程度の意味をしか持たない憑靈なのである。先に貴船の神の軽薄さと書いたのはこの意味なのであって、よからぬ考えを抱いて詣でて来る女の望みを、気まぐれに叶えてしまったというところにこの神の笑われてもよいところが出て来てしまっているのである。このようにして「鉄輪」は「巻絹」「二人静」式の憑靈能としても本筋ならぬ世話ものの的位置にあるということが出来る。

「鉄輪」は、広い意味での鬼の能である。女の鬼は「紅葉狩」「安達原」等であり、「葵上」「道成寺」もこの範疇に近い。前二者が五番目ものの真の鬼であるのに対して、他の鬼は四番目ものの執心の鬼である。

恋の身の。浮かむ事なき賀茂川に。沈みしは水の。青き鬼。われは貴船の川瀬の螢火。頭に戴く鉄輪の足の。焰の赤き。鬼となつて

とか

いはんや年月思ひに沈む恨みの数。積って執心の鬼となるも理や

等と、「鉄輪」の後半には鬼という字がしばしば使われ、「執心の鬼」という詞も見えている。

真の鬼の能のうちで「葵上」と「鉄輪」の如き対照的の例を挙げるとすれば、「紅葉狩」と「安達原」の対比がある。前者は

やごとなき上臈の。幕うちまはし屏風を立て。酒宴半ばと見えて候

とある、身分の高い女性に姿を変えている鬼女であり、後者は

人里遠きこの野辺の。松風烈しく吹き荒れて。月影たまらぬ闇のうちには。いかでか留め申すべき

と、シテの謡にもあるように、行きくれた山伏一行が宿ろうとする、見るからにみすばらしい一軒屋の賤の女なのである。この、姿のちがいでからでも一目瞭然たるものがあるように、高貴な女に化している「紅葉狩」の鬼は、

あら情なの御事や。一村雨の雨宿り。一樹の蔭に。立ち寄りて。一河の流れを酌む酒を。いかでか見捨て給ふべきと。恥かしなが

らも袂にすがり留むれば。さすが岩木にあらざれば。心弱くも立ち帰る。所は山路の菊の酒何かは苦しかるべきと、ワキ維茂を色を以って誘い、

げに面白や所から。巖上の苔筵。片敷く袖も紅葉衣のくれなる深き顔はせの。この世の人も。思はれず。胸うち騒ぐばかりなり

と、維茂をして呆然たらしめているほどなのであるに對して、「安達原」の女は

あさましや人界に生を受けながら。かかる憂き世に明け暮らし。身を苦しむる悲しさよ

と身の上をなげき、梓梓輪にすがって糸を繰って見せる老女である。その宿りは、さすがの山伏をして

異草もまじる茅筵。うたてや今宵敷きなまし。強ひても宿をかり衣。かたしく袖の露深き。草の庵のせはしなき。旅寝の床ぞもの憂き旅寝の床ぞもの憂き

と嘆せしめるほどなのである。

この二曲の間にあるものは、貴女と賤女とのちがいであり、若い女と老女とのちがいであり、遊ぶ人と生活に疲れた人のちがいであり。それが鬼の意志を持ってあらわれるとき、前者は色を以て人を誘い、呆然たらしめて後

成陽宮の。煙の中に。七尺の屏風しちせきの上になほ。余りてそのたけ。一丈の鬼神の。角はかほそく眼は日月面じつげつめんを向くべきやうぞなきという、極めて陽性の鬼の姿をあらわすのであるが、「安達原」は、「上の山に上り木をとりて。焚火をしてあて申さうずるにて候」と行きかかつて、「閨の内いんないばし御覽ごらんじ候な」と制し、中入する。能力のはしたない行動によってワキが見た閨の内は

膿血うみけつ忽ち融滌し。臭穢くさいは満ちて膨脹ぼうちやうし。膚膩はうやく悉く爛壞らんわいせり、人の死骸は数知らず。軒と等しく積み置きたり

という状態であり、

野風山風吹き落ちて。鳴神稲妻天地に満ちて。空かき曇る雨の夜の。鬼一口に喰はんとて。歩み寄る足音。振り上ぐる鉄杖の勢ひ。あたりを払つて恐ろしや

と、非常に陰性の振舞いに及ぶ鬼なのである。この二曲の対比は、鬼の能の二つの面を、非常によくあらわしていると思われる。

執心の鬼の能ではしかし、この二曲の場合のような鮮かな例は見られないであろう。そこには鬼としての意向以前に、人間としての執念が語られねばならぬからであり、執念の具体的な表現という点では、貴女の場合よりも賤女の場合の方がはるかに陽性の、あらゆる発想をせぬともかぎらぬからである。「鉄輪」のシテは「葵上」のシテに対して、丁度「安達原」のシテが「紅葉狩」のシテに対して持つと同様な位置を持つことになるわけであるが、その執念をあらわす詞章は、いかにもくどくどとかきくどく體のものであり、いでいで命を取らんと咎を振り上げうはなりの。髪を手からまいて。打つやうつの山の。夢現とも。分かざるうき世に。因果はめぐりあひたり今更さこそ。悔しからめさて懲りや思ひ知れ

と、打ちながらもなおかきくどいてる態は、「葵上」のシテが、ツレとのカケ合に

「あら恨めしや。今は打たでは叶ひ候まじ

「あらあさましや六条の。御息所ほどの御身にて。うはなり打ちの御ふるまひ。いかでさる事の候べき。唯思しめし止まり給へ

「いやいかにいふとも。今は打たでは叶ふまじと。枕に立ち寄りちやうと打てば

「この上はとて立ち寄りて。わらはは後にて苦を見る。

「今の恨みはありし報い

「慎毒の焰ほろは

「身を焦がす

「思ひ知らずや

「思ひ知れ

と、一個の激しい意志のかたまりのようになって葵上に迫っているのとの間に、陰陽の対照をはっきりと感ずることが出来る。しかし他の部分においてはそうとも言い切れることは難しいと思われる。

「鉄輪」では、賤女の恨みらしい陰々としたものと、世話もの風のあらわな感情とがない交ぜになって効果をあげている。現在観世流の装束付けでは「葵上」のシテが鱗箔の腰巻で、しかも後シテは唐織を被いで出てやがてそれを腰巻の上から腰にまとうように対して、

「鉄輪」の後シテは黒地に縫箔の腰巻で、被衣は用いない。両曲ともに、赤頭・半被・半切という「紅葉狩」のシテに比べてはかなり現実に近い装束付けではあるが、「鉄輪」の方が腰巻の用い方に關してはあらわであり、一方その紋様においてはるかに地味である。

「鉄輪」の装束付けの最も大きな特徴は、頭に戴く作物の鉄輪にあり、紅い毛で焰が造型されている。面は般若よりも地味な橋姫を用いるが、着付は赤地箔、作物も「葵上」の出小袖に比べて、祈禱台の上に男の烏帽子・女の黒髪と、すべてはあらわな舞台面である。恋の物狂いであるから、「班女」にあるような一種のエロティシズムは当然有るべきで、「葵上」の場合など、替之型で後シテが緋長袴を着ける時には殊にその感が強いのであるが、「鉄輪」の場合は賤女としての地味な要素と、世話ものの執念ものであるという、あらわなものを要求する面とがまざり合つて、奇妙に調和しない印象を残すのである。ワキの祈りも、「葵上」などにある「曇誤三曼荼羅曰羅赦」ではなくて

それ天開け地固まっしよりこの方。伊弉諾伊弉冊の尊。天の磐座にして。みとのまくばひありしより。男女夫婦の語らひをなし。陰陽の道。永く伝はる。それになんぞ魍魎神妨げをなし。非業の命を取らんとや

と祈っているのは、陰陽師の實際の口調をまねたものかもしれないが、極めてあらわな調子であり、聞き様によっては卑猥でさえある。このような点を総合すると、「鉄輪」が鬼能としても世話ものの位置にあることが明らかに成つて来るが、このような世話物的要素を検討して行く結果として、我々はもう一度執念ものとしての「鉄輪」の世界へ帰ってみなければならぬであらう。

「鉄輪」には二人のワキが出る。一人は先に述べた陰陽師（晴明と呼ばれている）であり、一人は女の夫である素袍上下の男である。一般にワキは、シテの現在位置を決定するのに重要な役割を持つていると思われる。このことについては別の機会に詳しく述べることにはしたいが、祈りのワキの他にもう一人のワキがあることから、鬼ものと執念ものという二重の性格をこのシテが持つているのであることは予想出来る。しかし、実上演はワキヅレと呼ばれるこの第二のワキは、丁度他の曲の間狂言のように、前シテの中入後に登場してワキを呼び出し、後シテの出の前に退場してしまう。後シテに対しては、舞台面に一個の侍烏帽子を残すのみなのは、丁度「葵上」の出し小袖に似ていると言える。演能の上からは、あくまで影の如き存在なのである。しかし「葵上」の場合とちがって、こ

の影の如き男を舞台に出すことによって、作者はたしかにひとつの効果を予想しているのである。それは、シテがかくまであらわに且つ性急に恨みを表明している当の相手を、うちしおれた姿で舞台に出すことによって、観客に具体的な知識を与えることから生ずる効果であって、ワキツレとワキとの間に交わされる短い会話が、生死の問題に関する緊張したものであればあるだけ、観客はシテの立場との対照をそこに感じ、またシテの恨みの行きつく先をいつもはっきり知っていればいるだけ、シテの心の葛藤をはなれて具体的な結果を見たがる方に傾いて行くであろう。後シテの内部で相剋するものが恨みと恥ではなくて、男への憎しみと哀れみとであるということにこのことは関係がある。執念ものである以上シテの心理を描かねばならないのであるが、それが「葵上」の場合のような形ではなく、シテが男を殺すか殺さぬかということのみに焦点がしぼられて来ることのために、ワキツレの登場が要求されたのである。にもかかわらず、「鉄輪」の舞台面がうったえて来るものは、そうした生か死かのせっぱつまつた問題ではない。それは男が、ワキはなくワキツレとしてあくまで従の立場で描かれているからであって、シテの心の行きつく先をたださし示すためにのみ舞台にあらわれたのであるとすれば、効果としてはシテの狂燥めいた言動のみが浮き上って来る結果になるであろう。

このようにしてあらわされたシテの恨みは、「葵上」や「狂女」の場合のような幽玄な装飾や深い哀れさを持ってはいない。作者の意図は、そうしたものをすべてこの曲から取り去って、ただあらわで具体的な人間心理を舞台上に表出しようとしたのである。それはおそろしい女の執念ではあるのだが、貴船の神にその執念の成就を祈りに行っても、神の力にすぎるだけでなく自ら鬼になろうと祈っているほど性急な女であり、神自身ももとの性質から、更にはいささか軽薄な印象をさえ与えつつ女に復讐をゆるしてしまう、その間の構成には「剣の巻」の世界をとびこえて、古代の説話の世界にある賤女の嫉妬の物語へと、この能を導いて行こうという意図が見えるのである。それは、賤女の嫉妬を笑うという作者の態度である。説話の世界で、笑うべきものとしてあつかって来たこのテーマに対する態度が、「剣の巻」を通してこの能に復活して来たことと見ることが出来る。

前に述べたように、「鉄輪」のシテの心持は決して単純なものと言いつつ切ってしまうことは出来ないし、舞台面の効果も、狂言的リアリズムの世界からは未だ遠く、且つ複雑である。したがってこの曲が、観客を単純な笑いへとさそいこむほど陽性のものでないことは明らかであって、古代の説話に中世の複雑な生活感情が注入されて、より深いものになっていることは事実である。

古代では専ら笑われてばかり居た賤女の感情に、決して深くはないが鋭い観察が加えられているのはこの曲の価値のひとつである。しかし賤女を笑うという古代人の態度は、ここでは一応シテを同情ぬきに突き放した脚色態度を採るということにおいて復活しているのであって、前述の鋭い観察もここから生れて来るのであるし、貴船の神とシテとの交渉が皮肉に見られ得るのも、そこから出発した脚色態度の成果なのである。

後シテの態度には男への恨みと哀惜とが交錯してあらわれているが、その相剋を断ち切って「いでいで命を取らん」と迫って行く、ワキによって勧請されている三十番神によって追いやられてしまう。

殊更恨めしき。あだし男を。取って行かんと臥したる枕に立ち寄り見れば。恐ろしや御幣に。三十番神ましまして。魍魎鬼神は穢らやしや出でよ出でよと責め給ふぞや。腹立ちや思ふ夫をば取らであまさへ神々の。責めを蒙る悪鬼の神通力自在の勢ひ絶えてと、シテの眼に映つて来る三十番神の姿は、恨みの中にあらわれて来る哀れみと同様、突然シテの感覚の中に入り込んで来る。それまでシテの心で行われていた恨みと愛との相剋が、シテの恨みと三十番神の威力との戦いにすり代わって来るのである。それは三十番神の姿を実はシテの内心の姿の象徴として作者が見ているのではないかと思われるほど自然な効果を俾って局面を変えて行く。

さしもシテがたのんでいた貴船の神の威力も、三十番神の前に何の争いもなく屈伏してしまうとすれば、神の威力をこれほどないがしろにした曲も少いわけであるが、はじめから貴船の神があやしげな願いをかなえる神に仕立てられている点から見て、果して神が女に本当の威力を与えたのであろうかという疑問も生れて来る。「怒れる心」を持ってという神託をたよりに一生懸命鬼にならんとつとめた女も内心の葛藤によって鬼になりきれなかったのかもしれないし、貴船の神が果して本当のことを彼女に教えたのかどうかも実は疑わしいのである。

後シテが調伏されても完全に負けてしまうのではなく「いふ声ばかり聞えて姿は目に見えぬ鬼」となっているのは、貴船の神への作者の遠慮があるのかもしれないが、本当は貴船の神にさえも笑われて相手にされなかつた賤しい女の恨みが、成仏得脱という境地に至るにはあまりに強く残りすぎた結果なのではなからうか。